

出雲大社・巨大建築の謎

藤岡 大拙

一、日本書紀 斉明紀の一節

是歲、出雲國造名を闕せり。に命せて、神の宮を修嚴はしむ。狐、於友郡の役丁の執れる葛の末を嚙ひ斷ちて去ぬ。又、狗、死人の手臂を言屋社に嚙ひ置けり。言屋、此をば伊浮瑯といふ。天子の崩りまさむ兆なり。

『日本書紀下』日本古典文學体系(岩波書店)

二、古代の神社はどんな形？ 大社は？

出雲国風土記「杵築郷」

杵築郷。郡家の西北二十八里六十歩なり。八束水臣津野命の国引き給ひし後、所造天下大神の宮奉へまつらむとして、諸の皇神等宮処に参り集ひて杵築きたまひき。故、寸付と云ふ。〔神龜三年に、字を杵築と改む。〕

加藤義成著『修訂 出雲国風土記参究』（今井書店）

三、口遊（九七〇年 源為憲著）に「大屋の誦」あり

「雲太、和二、京三」

雲太 — 杵築大社社殿が一番
和二 — 東大寺大仏殿が二番
京三 — 京都の大極殿が三番

四、国造家の伝承

「上古三十二天、中古十六丈、そして今八丈」

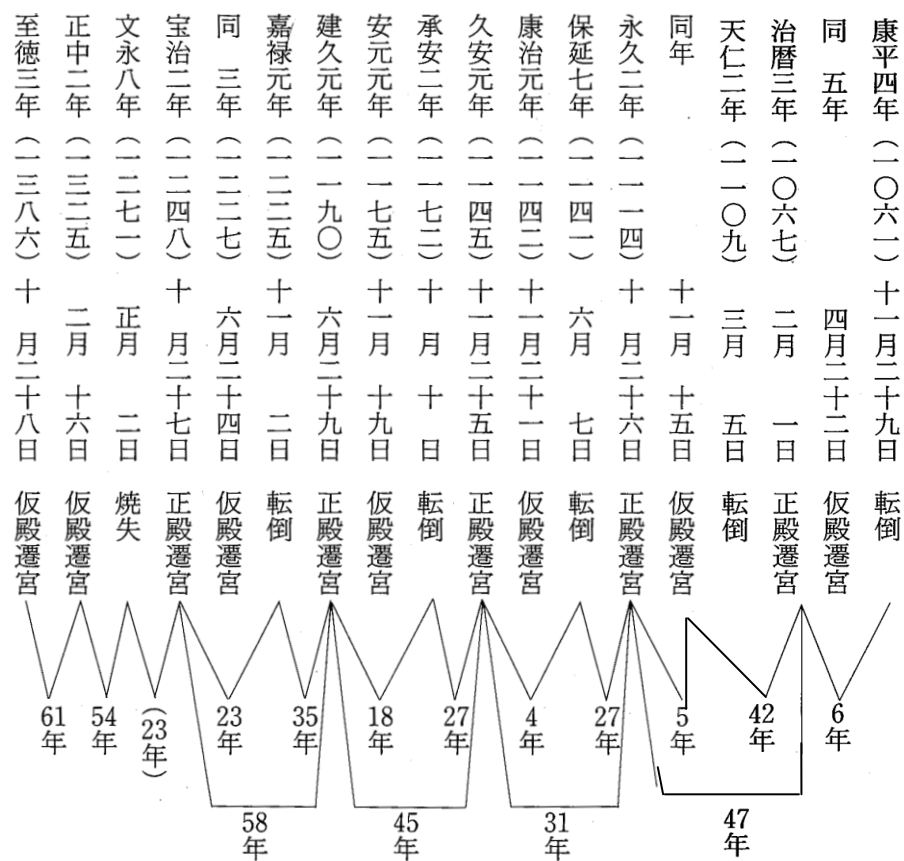
五、寂蓮法師（鎌倉初期）の歌

出雲の大社に詣て見待ければ、天雲たな引山のなかばまで、
かたそぎ（片削）のみえけるなん、此世の事とも覚えざりける
やはらぐる光や空にみちぬらん雲にわけ入ちぎ（千木）のかたそぎ



出雲大社本殿復元模型（平安時代 10世紀）

六、顛倒年表



『大社町史上巻』

七、まとめ

(一) 杵築大社は最初はどんなかたち？

(二) 奈良時代はどんな大きさ？

(三) 平安時代巨大化したのはなぜ？

(四) 連続転倒しても、なぜ巨大神殿を建て続けたのか？